

廊 門 の 前

あらゆる種類の散歩者出で来る

手職人の徒弟数人

なぜそっちの方へ行くんだい？

他の仲間

おいら達は山番小屋へ行く。

最初の組

おいら達は磨舎(こなや)の方へぶらぶら歩こうと思うのだ。

徒弟の一人

水茶屋の方へ行くように勧めたいね。

第二の徒弟

あっちへ行く道はまるでつまらないぜ。

第二の組

ところでお前は どうする？

第三の徒弟

おいらはみんなと一緒に 行かあ。

第四の徒弟

お城村の方へ登って来いよ、悪いことは云わない、
あすこには一等いい女と一等旨いビールと、
それから飛び切りの出入りという奴があるぜ。

第五の徒弟

いい気な野郎だなあ、
又喧嘩の皮がむずむずするのかい、三度目だぜ。
おいらはあんなところへは行きたくねえね、彼処のことを思ってもぞっとする。

女 中

いやだわ、いやだわ！あたい町へ帰るわ。

第二の女

あたい達きつと、あの人が彼処のぼぷらの傍に来ているのに逢えてよ。

最初の女

来ていたってあたいには大して有難くもないわ。
あの人はお前とくつついて歩いて、
踊場でもただ御前とばかり踊るんだわ。
お前の嬉しいのがあたいに何になるの？

第二の女

大丈夫、今日は一人じゃなくってよ、
あの縮れ頭ね、あれと来る積もりだと云ってたわ。

学 生

どっこい、あの元気なお茶っぴい連の歩きようはどうだ！
兄弟分、来たまえ！あいつらに随いて行かなきゃ嘘だぜ。

きついビールにひりつく煙草、
それにめかした女中さん、というのが今僕の趣味なんだ。

市民の娘

まああの様子の好い書生さんを見て御覧なさいよ、
本当に恥曝しだわねえ。
どんな立派な御交際(つきあい)でも出来る方達なのに
あんな女中のあとなんか追っかけて！

第二の学生(第一の学生に)

そんなに駆け出すなよ！あの、うしろの方から二人やって来る、
どっちも仲々さっぱりした風をしているだろう、
一人は僕の隣の娘だ。
僕はあの娘に随分参っているんだ。
娘達はゆっくり歩いている、
でもおしまいには僕達を連れに誘うだろうぜ。

第一の学生

兄弟分、いけないよ！僕は窮屈な目に遇わされるのは御免だ。
急いだり！あのももんじいを逃がさんように。
土曜日に箒を持った手に限るよ、
日曜にうまく撫でたりさすったりさせるには。

市 民

いや、感心しませんな、今度の市長には！
役についた今になって、日増しに身勝手な真似を仕募(つの)ります。
そうして市のために何をあの人がしています？
一日一日物事がまずくなっていくばかりじゃありませんか？
我々はこれまでになく御布令に縛られて、
おまけに前々になく金を払わされるのですからね。

乞 食(歌う)

御情け深いお旦那様、お美しい御婦人方、
御化粧の御立派な方、頬っぺのお紅い方。
どうぞどうぞ、私を御覧下さいませ、
私の難儀に御目留められ、助けてやって下さいませ！
此处で私が歌うのを、無駄にせぬよう願います！
施し好きの方だけが、気が晴々と致します。
どなたも遊ぶ今日の日が
収穫(とりいれ)の日と私(わし)になれ。

第二の市民

日曜や祭日で一番嬉しいのは
戦争や闘(とき)の声の話をすることですな、
それが背後(うしろ)の方で、遠くで、土耳其(トルコ)で、
民と民とがぶち合いっこをやるんなら。
こちとらは窓際に立って、一杯ぐっと飲み干して、
色とりどりの船が流れを滑り下るのを眺めていると来る。
それから晩には楽しくうちへ帰って
平和と平和な時代とを祝福するのですな。

第三の市民

お隣の大將、全くですよ！それだからよそは勝手にさして置くんでさあ----

奴等は脳天をぶち割り合うも結構、
何から何までごった返すも結構、
ただうちだけは昔通りと来たいね。

老 婆(市民の娘へ)

おや！えらいおめかしですね！綺麗な若い嬢っちゃん方だ！
お前さん達には誰が見惚れずにいられますかよ。----
ただそんなにつんけんさらぬが好い！それぐらいてもう沢山だ！
それにお前さん達の願いを叶えることなら、わたしにも出来るつもりですよ。

市民の娘

アガーテさん、あっちへ行きましょうよ！私気をつけてんのよ、
あんな魔法使いとおおっぴらに歩かないように。
あの人は聖アンドレアスの晩、私に
未来のいい人の姿をありありと見せてくれたには違いないのだけれど----

もう一人の娘

私には水晶に現わして見せてくれてよ、
軍人風だったわ、大勢の命知らずの中に交じていたの。
私よく気をつけて、何処へ行ってもそれらしい人を探して見るのだけれど、
どうしてもめっかりはしないのよ。

兵士の一隊

高壘銃眼
きびしき城を、
傲り高ぶり
嘲る乙女(おとめ)を、
攻め落とさばや！
労苦は酷(きび)し、
報償(むくい)はめでたし！

召募の喇叭よ
我等を導け、
歓喜の中へも、
戦士の野へも。
これこそ襲撃！
これこそ生(いのち)！
少女も城も
落とさにおかぬ。
労苦は酷(きび)し、
報償(むくい)はめでたし！
かくぞ戦士は
進み行く。

ファウストとヴァークナー

ファウスト

河も小川も氷の縛(いまし)めから解き放たれた、
春の、恵み深き・生命(いのち)を呼び醒ます眼差しの注ぐままに。
谷間には希望の幸(さち)が緑し始める。
年寄りの冬は、病みさらばうて、
荒くれた山間(やまあい)へ退却する。
それは逃げながらも猶其処から
粒立った氷の力無き一しぶきを送って

青みかかる野の上に段だらを描かせる。
併し日の光は白いものの残っていることを許さない。
到る処に形成と努力とが身動(じろ)きする、
日は何物をも色彩で生かそうとする。
それでもこの界限には花が見えないので
日は着飾った人達をその代わりとしている。
ふりかえって、この高みから
町の方を眺め返して御覧。
うつろな・暗い廊門から
色様々の群衆が押し出して来る。
誰でも今日は日に当たるのがひどく嬉しいのだ。
人々は主の復活祭を祝う、
自分達その人が復活したのだからね----
低い家々の鬱陶しい部屋の中から、
手職や商売の絆から、
破風や屋根の重苦しきから、
街の押し潰すような狭さから、
会堂の尊い闇夜から、
人はみんな日の当たるどころへ持ち出されたのだ。
あれ見たまえ、見たまえ！どんなに素早く大勢が
庭や野の上を散らばって行くことだろう。
河は、横にも縦にも、どんなに多くの
楽しげな小舟を浮かべて運んでいることだろう。
沈みそうなほど一杯に人を載せて
あの最後の小舟は岸を離れて行く。
山を縫う遙かな道々からさえ
色美しい衣装がちらちらとこちらへ光を送って来る。
もう村のどよめきが聞こえ出した。
此処は民衆のためには本当の天国なのだね、
老若ともに満足して歓呼している----
「此処では俺も人間だ、此処では俺も物の数だ」と。

ヴァークナー

先生、貴方と散歩しますのは、
名誉でもあり為にもなります。
でも私一人ではこんなところへ迷い込みは致しませんでしょう、
一体私は何でも粗野なものの敵でございますから。
提琴も、叫び声も、王様こかしも
私にはたまらなく厭な響きでございます。
みんな、悪霊に駆られたように騒ぎ廻って、
それを歓喜だの、歌だのと申すのでございますもの。

百姓達、菩提樹の下にて。

舞踏と歌謡

羊飼殿踊りに来ようとめかした、
色あるじゃけつに、りぼんや花冠(はなわ)も揃ってた、
中々着附けがいきだった。
菩提樹はもうまわり一杯人だった。
どいつもこいつも狂ったように踊ってた。
ユッヘエ！ユッヘエ！
ユッヘイザ！ヘイザ！ヘエ！
胡弓はこんなに弾き進む。

どっこい、奴さん人押しわけて駆け付けた、
はずみに奴さん一人の娘をつつついた、
ちょいと自分の片肘で。
出花のねえさんあと振り向いてこう云うた、
「まあ、お前さんよっぽど頓馬だね、
ユッヘエ！ユッヘエ！
ユッヘイザ！ヘイザ！ヘエ！
そう不作法では困ります」。

それでもせわしく輪を描きながら廻った、
右へくるり、左へくるりと踊った、
上衣がみんな飛び上がる。
赤くなったり、熱くなったり、御兩人
腕を差し交え、息を衝き衝き休んだ。
ユッヘエ！ユッヘエ！
ユッヘイザ！ヘイザ！ヘエ！
御腰にちょいと肘が来る。

いやよ御前さん、心安立ておよしなね！
女夫約束固めた人でも振り棄てて
騙した男はたとある！
それでも男は機嫌とりとり連れ退いた、
菩提樹の方から遠音に響いてきこえ来る----
ユッヘエ！ユッヘエ！
ユッヘイザ！ヘイザ！ヘエ！
胡弓の音やらわめく声。

老いたる農夫

博士様、有難いことござりますな、
今日の日は私共を御嫌いなさらずに
こういう下々の者のてんやわんやの中へ
大学者の御身分として御出掛け下さりますのは。
この一等上等のじょっきを御取り下さいませ、
私共が新しい酒を充たしたのでござります、
私はこれを差し上げて声高に御壽(ことほ)き申します、
貴方様の渴きを止めて御あげ申すばかりでなく----
これにはいつている滴(しずく)の数ほど
御壽命の日が延びますように。

ファウスト

では元気づけの飲物を頂戴して、
貴君方御一同に祝福と感謝との御返しを致しましょう。

民衆圏をなして周囲に集まる。

老いたる農夫

ほんに、こんな結構なことはござりません、
貴方様が喜びの日にお見え下さったのは。
それでも貴方様は先年の災難のときにも
私共に親切にして下さりました。
此処にこうして生きている者のうちには、
あぶない瀬戸際になってから、おとう様の老先生様が
えらい高熱を直して下さった者も沢山ござります、

一体あの方が疫病を退治して下さったのでござりますから。
あの時分、貴方様はまだ御若かったが、
どの病家をも御見舞下されました、
随分沢山の死骸が搬(もち)はこ)び出されましたが、
貴方様は御無事で出てお出でなされました。
色々と酷しい試練を御凌ぎになっていらっしやいましたね。
人を助ける人を天にいます助け手が助けて下さったのでござりましょう。

一 同

極め付けの先生のために御健康を祈ります、
猶末永く人助けが出来ますように！

ファウスト

上にいらっしやるあの方の前に頭をおさげなさい、
その方が助けることを教えもし、助けを送っても下さるのです。

(彼ヴァークナーと共に歩を移す)

ヴァークナー

ねえ大先生、どんなでございましょうねえ、
この大勢の尊敬をお受けになる御心持ちは！
ああ！自分の才能でこういう効果を
挙げることの出来る人こそ幸福だ！
父親は子供に先生を指さしして見せてやる、
誰も彼も問い合って、押し合って、駆け寄って来る、
胡弓が途ざれる、踊り手の足が止まる。
先生が御通りになると人牆(かき)が出来上がって、
帽子が振り上げられる----
もう少しのこと、みんなが膝をついて拝むでしょう、
聖餅が御通りになるときのように。

ファウスト

もう三四歩登るとあの石のところへ着く、
此処で我々の遠足の足を休めよう。
わしは幾度も、物思いに沈みながら一人で此処に腰をかけていた、
そうして祈祷で、断食で、身を苦しめたものだ。
希望も饒(ゆた)かだったし、信仰も堅かったし、
涙を垂れ、吐息を衝き、手を揉み合わせて
あの疫病の終息を天にいます主に
無理にも御願い申そうと考えたものだ。
今は群衆の賞讃がわしには嘲笑のように響く。
ああ、君がわしの胸の内に読むことが出来たらなあ、
父も子もまるで、
こういう賞讃を受ける値打ちがなかったということ！
わしの父は世に隠れた君子人だった、
父は自然のことやその神聖な諸境界について、
誠実ではあるが、併し自己流に、
奇癖のある熱中を捧げて、息を潜めていた。
鍊金道士の仲間にはいって、
黒い厨に閉じ籠もって、
無闇に込み入った方書きに従って、
性合(しょうあい)の悪いものを混ぜ合わせていた。
其処で不敵な求婚者の赤獅子が

温湯(ぬるゆ)の浴場で百合女と媾(あ)わされた、
それから二人は容赦のない熱火にかけられて
新婚の閨(ねや)から閨へ追い苦しめられた、
これで漸く瓶の中に虹色をして
若い女王が出現するのだった。
これで薬は出来上がった、患者は死んで行った、
誰がなおったか、それを問う者はなかった。
こんな風にわし達は地獄の濃液を用いて
この谷々この山々に
ペストよりも兇悪に暴れ廻ったのだ。
わしは幾千人にも毒を施した。
患者は衰死した、わしは生きていて、不敵な人殺しが
人に褒められることを目のあたり見なければならぬ。

ヴァークナー

先生はどうしてそんなことに屈託なさるのでしょう！
自分に伝えられた技術を
良心に従って慎重に行ってゆけば、
一人の真人間の仕事はそれで沢山ではないでしょうか？
貴方が若者としておとう様を尊信なされば、
喜んでその御伝えを御受けになるのはあたり前でしょう。
貴方が大人になって学業を御進めになれば、
御令息が一層高い目標に達せられるようになります。

ファウスト

ああ！この迷いの大海からかつぎ出ることもあろうと
まだ望みを抱くことが出来る者は幸福だ！
人は知らぬことが正に必要なので、
知っていることは用いるに足らぬ。
併し今この一時(ひととき)の美しい宝を
こんな憂愁によって苦くすることはよそう！
御覧、夕日の灼(かがや)きの中に
緑に取り巻かれた小屋がどんなに光って見えるだろう。
夕焼けは移り行き、色褪める、一日の命ももうおしまいになる、
それはあの向こうの方へ急いで、新しい生を促すのだ。
ああ、俺を地から飛び立たせる翼があって
あのあとを何処までも何処までも追って行かれたら嬉しかろうに！
俺は、久遠(くおん)の夕映えの中に、
静かな世界を脚下にして、
あらゆる高みは輝き、谷々は鎮もり、
銀(しろがね)の小川が黄金(こがね)の大江に注ぎ入るのを見るであろう。
そのとき、深山の数々を蔵する荒山も
神々に似た行路を妨げはすまい。
もう大海が、日に温(ぬる)める入江と共に、
驚き睜(みは)る眼の前に開ける。
けれども女神はとうとう沈んでしまいうらしい。
併し新しい衝動は目醒める。
彼女の永遠(とわ)の光が飲みたさに、
日を前にし、夜を背にし、
空を負い波に俯して、俺は急ぐ。
一つの美しい夢だ、併し女神は消えてしまう。
ああ！霊の翼に配するに
肉体の翼を以てすることは容易なことではない。

とは云え、人という人に生まれついているのは、
その感情の高く翔(かけ)り、前へ迫る性(さが)だ----
例えば、我々の頭上に、さ青なる空の広みに身を消しながら
声澄みて告天使の唱うときに。
又檜(ひのき)繁る険(こご)しき嶺の上遙かに、
鷺が翼を張って飛び漂い、
野を越え湖を越えて
黒鶴が家路を急ぐときに。

ヴァークナー

私も時偶気まぐれな思いに耽る時間がないことはありませんでしたが、
それでもついぞそんな衝動を感じたことはございません。
森や野を気が済むまで見たって知れたものです。
鳥の翼を羨むようなことは、私には決してございませんでしょう。
それとは何という相違でしょう、精神上的の快樂が、
一卷から一卷へ、一葉から一葉へと我々を連れ廻るのは。
そのとき冬の夜もなつかしい美しいものとなって、
祝福された生命が手足の隅々まで暖めて呉れます、
そうしてああ！貴重な古文書でも繰り広げるといような段になったら、
貴君も天国がそっくり天下って来るような気持ちがなさいますでしょう。

ファウスト

君は唯一つの衝動しか知って居らぬ。
おお、決してもう一つの衝動を学び知らぬようにしたまえ！
二つの魂が、ああ！わしの胸には住んでいる、
銘々に一つが他から離れたがっている。
一つのは荒く逞しい愛欲を以て
締め搦む手足で此の世にしがみ付く----
もう一つは強いて塵界を超脱して
高い先霊の野に立ち登って行く。
ああ、大気の中に霊どもがあつて、
天と地との間に、支配しつつ漂っているなら、
願わくは黄金色の靄(もや)から天降(あも)り立って、
俺を新たなる多彩の生へ連れ去ってくれい！
そうだ、せめて一つ魔法の外套でも俺にあつて、
それが見知らぬ国々へ俺を運んでくれるなら、
俺のためには、どんな錦繡(きんしゅう)にも、
王者の玉套(ぎょくとう)にも換えられぬ宝なのだがなあ！

ヴァークナー

あの知れ渡っている群れをお呼びなさいますな、
あの手合いは雲烟の境に流れをなしつつはびこっていて、
人間に、千様の危害を
八方から加えようとして居ります。
北方からは鋭利な魔神の齒が
鏃(やじり)のように尖った舌を具えて、先生に襲いかかります。
東方からは、水気(みずけ)を奪いながら押し寄せて来て、
奴等は先生の肺臓で身を肥やします。
そうして南方が砂漠から奴等を送って、
先生の頭顱(とうろ)の上に、熱火に熱火を積み重ねれば、
西方は、最初清爽を齎(もたら)すようできて、
貴方をも野をも牧場をも水漬しにする鬼群を連れて来ます。
奴等が喜んで人言を聴くのは、害を与えることが好きだからです。

喜んで命を奉ずるのは、私どもを欺くのを喜ばこそです。
奴等は天から送られた者のような顔をして、
嘘を衝くときに天使めいて囁くのです。
とにかく参りましょうよ！世界はもう鼠色になっている、
風が冷々(ひやひや)として、霧が降りる！
夕方になって始めて家の有難味が知れますなあ----
おや、なぜ先生は立ち留まって驚いたように向こうを御覧になるのです？
一体黄昏の中で何が先生をそんなに掴まえて放さないのですか？

ファウスト

君には芽畑や切株畑の間を駆け廻っている黒犬が見えるかい？

ヴァークナー

もうさっきから見えています、私には別に大したこととも思えませんでした。

ファウスト

好く見て見給え！君はあの生物(いきもの)を何だと思う？

ヴァークナー

尨犬(むくいぬ)だと思いますね、奴の流儀で
主人の跡を探して苦勞しているのでしょう。

ファウスト

君にはわかるかい、あいつが広く蝸牛のような圈を描いて
我々を廻って、次第次第に近寄って遣って来るのが？
そうしてわしの見間違いでなかったら、一つの火の渦巻きが
あいつの通る道の上に尾をひいているようだね。

ヴァークナー

私には一匹の黒い尨犬しか見えませんね。
多分先生のは御眼の迷いでございましょう。

ファウスト

わしの見るところでは、どうも微かな蠱(まじ)の活索(わな)を
未来の縁を結ぶために、わし達の足のまわりに引き廻すらしい。

ヴァークナー

私が見れば、あいつは狐疑しておずおずと私達のめぐりを跳ね廻っています、
主人はいずに二人の見知らぬ人を見るのですからね。

ファウスト

圈が狭くなる。奴、もう傍へ来た！

ヴァークナー

御覧なさい！犬一匹ですぜ、化物がやって来たのではございません。
うなったり疑ったり、腹這いになったり、
尾を掉(ふ)ったり。みんな犬の習性ですよ。

ファウスト

こら、俺達の仲間になれ！此処へ来い！

ヴァークナー

犬馬鹿らしい奴ですね。

先生が立ち留まれば、前に据わって御顔色を伺うでしょう、
物をおっしゃれば、立ち上がって飛びつこうとするでしょう。
何かなくなせば、とって参りましょう。
杖のあとを追かけて水の中にも飛び込むでしょう。

ファウスト

君の云う通りらしいね。霊の痕が見えん、
すべてが躰(しつけ)でできている。

ヴァークナー

好く馴らされた犬なら、
賢者の御気にも召しましょう。
全く此奴は先生の御恩顧を受けるに値しますよ、
学生連に持って来いの学犬ですから。
(二人城門に入る)

書 斎

ファウスト尨犬を伴いて入り来たりつつ

ファウスト

俺は野や牧場をあとにして来た、
深き夜の闇はこれを掩い、
何かを前触れするような神聖な畏怖を以て
俺達のうちにより善き魂を呼び醒ました。
今、荒い衝動は、あらゆる
凶暴な行動と共に寝入っている。
人間愛が身じろき出す、神への愛が今身じろく。

じっとしている、尨犬！そんなにあちこち駆け廻るな！
その閥際でお前はくんくん何を嗅ぐのだ？
あの暖炉のうしろで寝ている、
俺の一等いいくしょんをお前に貸して遣る。
あの外の坂道で、お前が
駆けたり跳んだり俺達をもてなしてくれた代わりに、
今度は俺の方から接待を受けるがいい、
よく来てくれたと云われるような静かな客になって。

ああ我々の狭い小部屋に
らんぷの灯が再び優しくともると、
そのとき我々の胸の中が明るくなる、
己れを知れる心臓の中が明るくなる。
理性が又物を言いはじめる、
希望が再び花と咲(え)み出す。
人の心は生の小川へ、
ああ！生の元つ泉へとあこがれて行く。

うなるな、尨犬！今俺の魂の
全体を領している聖なる物の音(ね)には、
獣の声では調子が合おうようもない。
俺達は見馴れている----人間は
自分のわからぬことは嘲るものだ、
幾度か彼等にとってうるさいものとなる
善と美とを見ては眩くものだ。

犬も、人間同様に、ぶつぶつ云うつもりなのかい？

けれどもああ！そうありがたい気で一杯でも、
もう満足がこの胸から湧いて来る気がせぬ。
なぜ又流れがこんなに直に涸れてしまって、
俺達は又もや渴(かわ)きに悩まなくてはならんのか？
この経験は幾度も幾度もして来た。
併しこの欠陥は埋め合わせが出来る。
我々は地を越えるものの敬重を教えられる、
我々は啓示にあこがれる、
他に比類なく尊く、美しく
新約の中に燃えているのがそれだ。
一つの願いが身に迫る----原本を開いて、
誠実な感じのままに、一度
聖なる原文を
好きな独逸語に訳して見たい。

(一書を開いてそれに取りかかる)

書かれた文句は----「始めに言葉ありき！」
此処で俺はもう躓く！誰の助けを借りて先へ進もう！
俺は言葉をそんなに高く値踏みすることはとても出来ん、
なんとか別に訳せずばなるまい、
俺が霊の正しい光照を受けているのなら。
書かれた文句は----「始めに意味ありき」。
第一句によく心を用いるがよい、
お前の筆が迂り過ぎんように！
あらゆるものを成し、造るものが意味であろうか？
こう書かるべきだった----「始めに力ありき！」
いや、これを書き下ろしているうちに、
もう、これでは足りんと警告するものがある。
やあ霊の助けだ！不意に途が開けて、
俺は安んじてこう書く----「始めに業ありき！」

俺の部屋に置いて貰いたいんなら、
尨犬奴、唸ることをよせ、
吼えることをよせ！
そんなに邪魔な仲間を
傍に置いて我慢して遣るわけには行かぬ。
好まぬところだが、俺は客友の権利を停止する、
扉はあいている、勝手に出て行け。
おや、俺の眼光に現れるのは何だ！
自然の世界にあり得ることだろうか？
影か？現(うつつ)か？
この尨犬は丈も伸び幅も増しおるな！
あいつは力一杯起き上がって来る、
これは犬の姿ではないぞ！
俺は何という化物をうちへ連れ込んだことだ！
奴はもう河馬ぐらいに見える、
火のような眼だ、恐ろしい歯並びだ。
おお！貴様は俺の手のうちのものだぞ！
こういう半分地獄生まれのものには
ソロモンの鍵が利く。

精霊ども(廊下にて)

あの中に一人捕まっておる！
じっとして外に居ろ、誰もついてはいるな！
鉄罫にかかった狐もどきに
地獄の古山猫がびくびくして居る。
でもよく見ておれ！
あちらへ漂い、こちらへ漂い、
昇ったり降ったりして居ろ、
あれは屹度逃げおおせるぞ、
あれに加勢が出来んなら、
あれをそのまま座らして置くな！
俺達みんなに気に入るように
あれはこれまで色々してくれたからな。

ファウスト

先ずこの獣に立ち向かうには
四者の呪いが必要だ----

ザラマンダー燃えよ、
ウンデーネうねれ、
ジルフェ消えよ、
コーボルトいそしめ。

四大を、
その力と
その性(さが)とを、
知らぬ者は、
霊どもを御する
師ではあるまい。

炎のうちに消えよ
ザラマンダー！
さざめきつつ流れ寄れ、
ウンデーネ！
隕星の美しさに輝け、
ジルフェ！
家の業助けよ、
インクーブス！インクーブス！
現れ出で、終わりを告げよ。

四者の孰れも
あの獣の中にはおらぬ。
奴はすましきって蹲(うずくま)って、齒をむいて俺を睨みおる。
これではまだ痛い目にならぬと見える。
貴様にはもっときつい呪文を
聞かねばならんぞ。

やくざ者奴、貴様は
地獄の逃亡人か？
そんならこの符を見い、
これには、暗黒の群れも
頂を屈するのだ！

もうごわごわした毛を豎(た)てて膨れ上がるな。

呪われたやつ奴！
貴様にはこれが読めるか？
曾(かつ)て産まれず、
言説せられず、
諸天に亘って漉(す)がれ、
無道にも刺し貫かれたる者が？

暖炉のうしろに追い込められて、
象のように膨れ上がる、
隙間一杯につまって、
霧となって散ろうとしおる。
天井へのぼるのはよせ！
先生の脚下へ身を投げい！
見ろ、俺はこけ嚇しに嚇しはせぬ。
神聖な火焰で貴様を焦がすぞ！
待つなよ！
三重に燃え立つ光炎(ほのお)を。
待つなよ！
俺の術のうちの一番きつい手を。

(霧落つると共に、メフィストーフェレス、
巡歴学生の装いにて暖炉の背後より立ち現る。)

メフィストーフェレス
何のためのその大騒ぎです？ 旦那、何か御用ですか？

ファウスト
そんならこれが尢犬の中味であったか！
巡歴学生か？ こいつは大笑いだ。

メフィストーフェレス
学者先生に御挨拶申し上げます！
私にしたたか汗を掻かせましたね。

ファウスト
君の名はなんと云う？

メフィストーフェレス
それは小さい御尋ねかと存じます、
言葉というものをあんなに蔑(さげす)んで、
あらゆる見せかけを遙かに遠ざけて、
ただ本質の深みに志すあなたとしては。

ファウスト
諸君の場合には、その本質を
大概、名前から読み出すことが出来る。
蒼蠅(さはえ)の神、害(そこな)う者、虚偽者(いつわりもの)などと云えば、
はっきり現れ過ぎるではないか。
まあ好い。一体君は何者だ？

メフィストーフェレス
常に悪を欲し

常に善を創造する・あの力の一部分です。

ファウスト

その謎めいた言葉の意(こころ)は？

メフィストーフェレス

私は常に否定する霊です！

そうしてそれが至当なのです。なぜなら、一切の生成するものは滅びるに値するものなのですから。

だから何ものも生成せぬに越したことはありません。

そんなわけで皆さんが、罪だの

破壊だの、約(つづ)めて言えば悪とおっしゃるものは、みんな

私の得意の領分なのです。

ファウスト

君は自分を一部分だと云う。それでも全体として俺の前にいるのか？

メフィストーフェレス

謙虚な真理を私は申すのです。

人間は、あのちっぽけな馬鹿世界は、

大抵自分を一つの全体と思い込んでいますがね----

私なんぞは、最初は一切であった部分の、その又一部分でさあ、

闇黒の一部分でさあ。闇黒は光明を産んだのですが、

高慢ちきな光明は、今度は母なる夜と

昔ながらの位を、空間を、争っています。

でもそれは旨く行かんでしょう、いくら努力したって

光明は物体にへばりついていきますからね。

それは物体から流れ出て、物体を美しくして、

而も一つの物体にさえその進路を妨げられるのですからね----

あれでは、私の望み通り、永持はしますまい。

あれは物体と一緒に滅びてしまうでしょう。

ファウスト

それで君の結構な役目はわかった！

君は大仕掛けには何も絶滅することが出来ないので、

そこで小刻みに始めるというわけだな。

メフィストーフェレス

それでも大したことは無論出来ませんがね。

無に対立している或物ですな、

そのちっとばかりの或物、即ちこの不恰好な世界ですな、

此奴は、これまで随分色々やって見ましたが、

どうにも手の着けようがなかったです、

大水でも暴風(あらし)でも地震でも火事でも----

海も陸も結局落ちつき払ってちゃんとしているのですからな！

それから動物とか人間とか、あの呪われた奴ばらと来ちゃあ、

猶さら仕末におえんです。

私はこれまでどれほど葬ってやったでしょう！

それでも依然として新しく爽やかな血が循(めぐ)っているのです。

この塩梅で続いて行くのだから、気ちがいになりたくもなろうじゃありませんか！

空気からも、水からも、又土地からも

千萬の芽がほどけて出ます、

乾いた処にも、湿った処にも、暖かい処にも、冷たい処にも！

若しも焰という奴を私の手に保留して置かなかつたら、
私には特別なものはなんにもなくなっていたでしょう。

ファウスト

そんなわけで、君は、永劫に運行する
健やかに創造する威力に立ち向かって、
冷たい悪魔の拳を振り上げるのだね、
それを意地悪に固めて見たって役にも立つまいに！
何か他の事を探してやって見たまえ、
混沌の風変わりな息子さん！

メフィストーフェレス

実際、仲間で工夫して見ましょうよ、
詳しいことは孰れこの次に！
この度のところはもう御暇申してもよござんすか？

ファウスト

なぜそんなことをきくんだか、俺にはわからんな。
これで君と御近付きになったというものだ、
君の気が向いたときには、又訪ねて来たまえ。
此処には窓がある、此処には扉口がある、
煙突なんぞも君には役に立つだろう。

メフィストーフェレス

白状しちゃいましょう！私が散歩に出かけるには、
ちよいとした邪魔があるのですよ、
貴君の閼際の魔除という奴が----

ファウスト

あの五芒星(ごぼうせい)が君を苦しめるのか？
おい、云いたまえ、地獄の息子さん、
若しあれが君を封ずるんなら、どうして君ははいれたんだ？
君ほどの霊がどうしてだまされたんだい？

メフィストーフェレス

好くあれを御覧なさい！しっかり引かれていないんです。
外へ向いている一角が、
御覧の通り、少しあいているでしょう。

ファウスト

偶然が旨く当たったわけだね！
此処で君は俺の捕虜というわけか？
これは思いがけぬ成功だった！

メフィストーフェレス

彦犬は跳び込んだとき夢中でした、
今となると事情が違います----
悪魔は家から出られないと来る。

ファウスト

ところが君、なぜ窓を抜けて出ない？

メフィストーフェレス

こういうのが悪魔や幽霊の一つの掟でしてね----
連中は忍び込んだ口から出なければいけない。
はいることは自由に任されているが、出ることにかけては私達は奴隷なんです。

ファウスト

地獄にも地獄の法律があるわけなのかい？
これは旨いな。こうなると君達紳士諸君と
契約を結ぶことも、随分出来るわけだろうね？

メフィストーフェレス

こちらが約束したことなら、貴君は気遣いなく召し上がられますとも、
ちよっぴりでもちよろまかすようなことは致しません。
でもそれはそう手短かにも行きませんから、
この次に御相談致しましょう。
とにかく、切に、痛切に御願い申します、
この度はこれで御暇下さるよう。

ファウスト

まあもうちょっとの間此処にいて、
先ず俺にいい話をきかせたまえ。

メフィストーフェレス

今度のところだけは御帰しなすって！すぐに帰って来ますから。
そのときにはなんでも御勝手におたずね下さいましよ。

ファウスト

俺が君を待ち伏せしたわけではなかった、
君が自分から網にひっかかったのだ。
悪魔をつかまえたものは、しっかり掴んでいるがいい！
早速もう一度攫(つか)まえることはむずかしからう。

メフィストーフェレス

たつての御望みなら、私もいなやはありません、
貴君の御伽(おとぎ)に此処にいてお上げ申しましょう。
但し私の芸で貴君の退屈凌ぎを
立派に遣って御覧に入れるという条件付きですよ。

ファウスト

喜んで拝見しよう。君の勝手に任せる。
ただ気持ちのいい芸でなくちやいかんぜ！

メフィストーフェレス

友よ、貴君はこの一時間で、
単調極まる一年以上に
官能の収穫を上げられるでしょう。
優しい霊どもが貴君に歌って聴かせるものや、
奴等の連れて来る美しい姿は、
空しい魔法の戯れではありませんぜ。
貴君の鼻も満悦するでしょう、
貴君の口にも好い味がするでしょう、
それから、貴君の肌も嬉しい目を見るでしょう。
前用意なんぞには及ばない、
我々仲間揃っている。さあ始めろ！

霊 ども

消えよ、上なる
暗き穹窿！
いや珍しく、親しげに、
蒼き瀬気(こうき)よ、
室(むろ)を窺(うかが)え！
暗き雲々は
散り失せぬらし！
星屑はきらめき、
和らげる日影
うちにさし入る。
天なる子等の
霊めく美(うま)しさ、
揺らめき撓(たわ)みつつ
漂いぞ過ぐる。
あこがるる思い
あとを追い行け。
かくてその衣の
ひらめく帯紐
野山を蔽い、
四阿(あずまや)を蔽う----
其処に世をかけて
思いも深く
恋人ぞ寄り添える。
四阿に四阿並ぶ！
芽立ちゆく蔓草！
枝とおおなる葡萄
立ち並ぶ压榨場(しばりば)の
樽中(たるなか)にたぎり落つ。
小川とたぎるは
泡立てる葡萄酒、
浄く、気高き
石の間をせせらぎ過ぎ、
山の高みを
そがいにしつつ
堪えて湖(うみ)となる、
緑なす丘々の
豊けさを繞(めぐ)りて。
さて群鳥(むらどり)は
歓喜を啜り飲み、
日の方へ飛び、
さやけき島の、
波間にゆらめき
漂える方へ
飛びぞ行くなる。
其処に群れなして
歓び呼ぶ音(ね)きこゆ、
牧(まき)の上には
踊る者見ゆ、
人さまざまに、
野もせに散りつつ。

高みを越えて
攀(よ)じ行くもあり、
湖の上
泳ぎ行くもあり、
み空かくるもあり。
皆人、生へ。
愛ある星の、
幸(さち)ある恵みの
遙けき方へ。

メフィストーフェレス

奴寝たな！空のか細い若造ども、旨くやった！
お前達、忠実(まめ)に奴を歌い寝かして呉れたね！
この合奏を恩に着るぞ。
奴さん、君はまだ悪魔を迎えて置ける男じゃないぜ！
艶な姿の夢で奴をまやかしてやれ、
妄想の海へ奴を沈めてやれ。
ところで、この閼の魔法をひき裂くには
鼠の牙がなければならぬ。
呪(まじな)いに時はかからない、
もう、一匹其処でかさこそする、すぐにも俺をききつけるだろう。

大鼠に小鼠に、蠅に、
蛙に、南京虫に、虫の御主人、
その方のお云い付けだぞ、元気に跳び出し、
この閼際を嚙りおれ。
此処に油をこうひくと----
早速お前はちょろちょろ駆けて出る！
さあすぐさま仕事だ！俺を封じた角の尖(とが)りは、
一等手前の縁(へり)の端だ。
もう一かじりだ、これで結構。----
さあ、ファウストさん、又御目にかかるまで、たと夢を御覧なさい。

ファウスト(醒めて)

俺は又しても欺かれたか？
これで群れなす精霊も消え失せるのか、
つまりは夢のまやかしに悪魔が見えて、
兎犬一匹逃げ出ただけか？

書 斎

ファウスト。メフィストーフェレス。

ファウスト

扉を敲(たた)くのかな？おはいんなさい！又俺を悩ましに来た奴は誰だろう？

メフィストーフェレス

私です。

ファウスト

おはいんなさい！

メフィストーフェレス

三度言わなくっちゃいけません。

ファウスト

はてさて、おはいんなさい！

メフィストーフェレス

これで結構です。

私達は大抵これで一緒にやっけて行けるでしょう？

貴君のふさぎの虫を追っ払ってあげようと思って、
身分の高い騎士になって来たのですよ。

赤い上衣には金の縁飾りがしてある、

小外套はごわごわした絹製です、

帽子には鳥の羽を挿しました、

それに、長い・尖った剣を吊り下げました。

そこで手短に貴君に御勧めしますが、

私と同じようにこういう支度をして貰いたいですな。

絆をぬけて、自由に、

人生とはどんなものかを経験なさるがいいです。

ファウスト

どんな着物を着たところで、この狭い
地上生活の苦を感じずにはいられまい。

ただ遊ぶには、俺は年をとり過ぎた、

願うことなしに暮らそうには、俺はまだ年が若すぎる。

世間が俺に何を叶えて呉れることが出来る？

欠乏に堪えなければならぬ！堪えなければならぬ！

これが永遠の歌なのだ、

それがあらゆる人の耳に響き、

それを、我々の一生涯のあいだ、

あらゆる時間が嗚(か)れ声で歌ってきかせるのだ。

徒らに危虞(きぐ)の思いをなして、俺は朝毎に目を醒ます、

俺は苦い涙で泣きたくなる、

その日ひねもす一つの願いをも、たった一つの願いをも

叶えぬ日の目を見るかと思えば。

行く手に望む快樂という快樂も

頑(かたく)々なあらさがしで味を減らされ、

潑刺とした我が胸の創造も、

千百の世醜で妨げられてしまう。

又夜が地上に降りて来ても、

俺は恐れを懷いて身を床に投げなくてはならぬ。

其処でも亦安寐(やすい)は恵まれずに、

荒くれた夢が俺を愕かすであろう。

俺のこの胸のうちに住んでいる神は

深く俺の内奥を攪(か)き動かすことは出来る。

俺の一切の諸力の上に君臨するこの神は

外に向かつては何一つ動かすことが出来ぬ。

それで俺には存在が重荷なのだ。

死が願わしく、生が憎いのだ。

メフィストーフェレス

その癖、死は決して心から歓迎される客ではありませんね。

ファウスト

ああ、勝軍の耀きのうちに、死が

血に染まる月桂冠をその顚顚(こめかみ)の周りに編みつけてやる人、
急調に狂い通した舞踏のあとで、
少女(おとめ)の両腕の中で死に見舞われる人、こういう男こそ仕合わせ者だ！
ああ、俺も崇(たか)い霊の力に打たれて
恍惚として、魂が抜けて、倒れてしまえばよかったに！

メフィストーフェレス

その癖、誰やらは茶色の液を、
あの晩、飲み干しはしませんでしたね。

ファウスト

探偵が君の道楽だと見えるね。

メフィストーフェレス

私は全能ではない、でもいろんな事が私に知れていますぜ。

ファウスト

あれは、あの恐ろしく騒立(さわだ)つ乱れの中から、
甘く、馴染みのある物の音が俺をひき出し、
幼児(おさなご)じみた感情の名残を
楽しかった昔の余響で欺いたのだ----
が、俺は詛(のろ)う、人の魂を
囹(おとり)やまやかして擒(とりこ)にして、
これを悲哀の洞窟の中に
眩(くらま)しつ媚びつ繋いで置く・一切の物を。
詛われてあれ、先ず、驕慢の心は！
霊はこれによって自らを重囿に置く。
詛われてあれ、我等の官能に
押し迫り来る現象の幻華は！
詛われてあれ、夢に我等に阿(おもね)る、
名聞や身後の誉れの迷いは！
詛われてあれ、占有として我等に媚び、
妻となり子となり、僕となり犁(すき)となるものは！
詛われてあれ、彼の金神(マムモン)は！それが財宝を以て
我等を促して不敵の業をさせるときにも、
レガ懈怠(けたい)の悦楽に誘うて
我等の下に茵(しとね)をかうときにも。
詛いあれ、葡萄の霊液に！
詛いあれ、彼のいと高き恋の恵みに！
詛いあれ、希望に！詛いあれ、信仰に、
何よりも詛いあれ、忍耐というものに！

霊どもの合唱(姿見えず)

痛まし！痛まし！
美しき世界を、
雄々しき拳もて、
君こそ毀(こぼ)ちつれ。
そは倒れ、そは崩(くず)る！
半ば神なる者打ちて碎(くだ)きぬ！
我等、その破片(かけら)を
無のうちへ運び行き、
歎くなり、
失せしその美(うま)しさを。

地上の子等のうち
優れて雄々しき者よ、
更に華やかに、
再びそを打ち建てよ、
君が胸内(むねぬち)に建て上げよ！
新たなる生の歩み
踏みそめよ、
爽やかなる官能(つかさ)もて。
さらば新しき歌
其処に響かむ！

メフィストーフェレス

あれは私の眷属の
小僧どもです。
御聞きなさい、快樂(けらく)と事業(わざ)を
賢(さか)しらに勧めるのを！
広い世界へ、
孤独の中から、
官能も血のめぐりもとまる処から、
貴君を誘(おび)き出そうとしています。

貴君の悲愁をおもちゃにすることはもうおよしなさい。
それは禿鷹のように貴君の命を喰うものですぜ。
最下等の奴等でも、それと一緒に居れば、
貴君が人間仲間のうちの一人の人間だということを感じさせます。
こう云ったからとて私の意味は
貴君を下司(げす)の中へ突っ込もうというのではありません。
私なんかは大物の中にははいらないが、
それでも貴君が私と一緒にあって、
障碍の歩みをやって見ようという思し召しなら、
私は喜んでそれに従って
即座に貴君のものとなってしましましょう。
私は貴君の御連れになる、
それからそれが御気に入ったら、
私は貴君の僕です、家隸です！

ファウスト

そうしてその代わりに、僕は君にどうすることになるのだ？

メフィストーフェレス

その話はまだゆっくりでいいのです。

ファウスト

いけない、いけない！悪魔は利己主義者だから、
他人のためになることを、
ただ神様のためというのでは、滅多にはしてくれまい。
条件をはっきり言って貰おう。
さういう僕(しもべ)は家内に危険を持って来るものだ。

メフィストーフェレス

此処では私が貴君に使われる義務を背負って、
休まず憩わず貴君の目配せに従いましょう。
私達が向こうで再びでつくわしたときは、

貴君が私に同じことをして下さるですな。

ファウスト

向こうなんぞは俺は大して気にかけない。
君が此の世をこなごなに打ち砕いてしまったら、
その次の世は出来る通りに出来上がるが好い。
この大地から俺の歓喜は湧き出す、
この太陽が俺の悩みに照る。
俺が先ずこの天地から別れてしまうことが出来たら、
その先は何でも、勝手に出来次第に、どうとでもなれ。
先のことは俺は聞く気がないのだ、
未来も人は憎んだり愛したりするか、
あの世にも亦
上や下があるか、などとは。

メフィストーフェレス

その意見なら、貴君は立派にやりおおせるでしょう。
約束なさい。近いうちに貴君に
私の術を面白くお目にかけましょう、
私は貴君に、まだ人間が見たこともないものを御覧に入れます。

ファウスト

君みたいなけちな悪魔が一体何を見せる積もりなのだ？
高きに向かっていそしむ人間の霊が
君等風情にわかったためしがあるかい？
それとも君の手には、満腹させない御馳走だの、
水銀のようにいつもころころして
君の手のうちに散る赤い金だの、
勝ちっこのない勝負事だの、
俺の胸に凭(もた)りながら、もう流眇(ながしめ)で
隣の男と約束する娘だの、
名望という、美しい、神々に似た快樂(けらく)で、
隕星(いんせい)のように消えてしまうやつだのがあるのかい？
俺に見せるが好い、摘まぬ間に腐る果(このみ)でも、
日毎に新しく緑する樹々でも。

メフィストーフェレス

そんな御注文には恐れません、
そういう珍物も御望みに応ぜられます。
それでも、良き友よ、じっとしていて何か旨い物を
食っていたいという時期が追々とやって来ますぜ。

ファウスト

俺がいい気になって懶(なま)け椅子に寝ていようとする日が来たら、
そのとき俺はすぐにおしまいになるが好い！
君が俺に媚びて、だまして、
俺を自惚れに甘んじさせることが出来るんなら、
君が俺を快樂で欺くことが出来るんなら----
それが俺の最後の日になれ！
賭の手を差し出そう！

メフィストーフェレス

よかろう！

ファウスト

この通りだ！
俺が瞬間に向かってこう云ったら----
まあ、待て！お前は実に美しい！と
こう云ったら君は俺を縛り上げてもいい。
その時俺は喜んで滅びよう！
その時葬(とむら)いの鐘が鳴るがいい、
その時君の奉公は済んでしまう、
時計は止まるが好い、針は落ちるが好い、
俺の一代がおしまいになれ！

メフィストーフレス

よく御考えなさい、私はそれを忘れませんよ。

ファウスト

君に十分その権利がある、
俺はあとさき見ずに大胆な真似をしたのではない。
停滞すれば俺は奴隷だ、
君のにしろ、誰のにしろ、それは問わぬ。

メフィストーフレス

早速今日の卒業宴会で、
僕(しもべ)として役目を果たしましょう。
ただもう一つ！----生前死後に変わりがないように、
二三行書いてお貰い申したいのですがね。

ファウスト

書き物まで請求するのかい、しみったれ！
君はまだ男というものを、男の言葉というものを見知ったことがないのか？
俺の口に出した言葉が、永遠に
俺の生きて行く日を支配する。それだけでは足りんのか？
世界は千百の流れをなして騒立ち続けて息(やす)まないではないか、
それなのに一つの約束が俺を抑留しなければならないのか？
併しこの妄想は我々の心の中に据えられている、
誰が好んでそれを脱却しようとする者があるか？
信義を清浄に胸の中に懐いている者こそ幸福だ、
どんな犠牲も彼に後悔させることはないであろう！
けれども書いたり封蠟を擦したりした羊皮紙は
化物だ、あらゆる人が皆それをこわがっている。
言葉は筆にされればもう死んだものなのに、
封蠟と革紙とが主催者となってしまうのに。
悪霊のお前さんは俺から何が欲しいのだ？
黄銅か、大理石か、羊皮紙か、紙か？
尖筆か、鑿(のみ)か、鵝(が)筆か、何で俺は書かねばならんのだ？
どれを選ぶのも君の勝手に任せる。

メフィストーフレス

どうして貴君は貴君の演説を
すぐに真っ赤になって誇張したがるのでしょうか？
どんな紙切れ一枚だって結構ですよ。
ちよいと血を一滴たらしめて署名して下さい。

ファウスト

これで君の気がすっかり済むことなら、
馬鹿げたことだがそうして置こうよ。

メフィストーフェレス

血はまるで特別な液汁ですからな。

ファウスト

ただ俺が盟約を破るだろうという心配だけは無用にしたまえ！
俺の全力をあげて努力していることは
俺が約束することと正に一つなのだ。
俺はあまりに丈高く身を膨らまし過ぎた。
たかが君なみの位(くらい)が俺に丁度のところだ。
大なる霊は俺を擯斥した、
俺の前に自然はその扉を閉ざした。
思索の糸は千切られてしまった。
あらゆる知識が嘔吐を誘うのも久しいものだ。
さあ官能の深みにはまって、
燃え立つ熱情を鎮めようではないか！
曾(かつ)て拏(と)げられたことのない魔法の被衣(かつぎ)の奥に
ありとある奇蹟をすぐにも用意して貰いたい！
共に身を時の早瀬のうちに、
事件の急調の中に投げ込もう！
固より其処には、痛苦と受用と、
成就と腹立たしさとが
あらむ限りの交錯を現ずるであろう。
ただ須臾(しゅゆ)も休まずに活動してこそ男だ。

メフィストーフェレス

貴君には何の尺度も限界も置かれていない。
到る処で撮(つま)み食をして、
逃げしなに何か搔(か)っさらう気におんななさい！
御気に召したものは、構わず自分のものになさい。
何でもはしっこく手を出すことです、愚図愚図しなさんな！

ファウスト

言っているじゃないか、歓楽が問題ではないのだよ。
俺は眼くるめく思いに身を捧げる---最も悲痛な受用に、
恋しれた憎悪に、心を爽やかにする腹立たしさに。
知識の衝迫から癒やされたこの胸は、
この先、どんな苦痛をも締め出してはならぬ。
そうして全人類が負わされているものを
俺の内なる自我に受けて味わい、
俺の霊を以て至高最深のものを捉え、
人類の慶福をも悲歎をもこの胸の上に積みあげて、
かくて俺自身の自我を人類の自我になるまで拡大しつつ、
人類そのものと等しく、遂には俺も亦破滅したい。

メフィストーフェレス

まあ御聞きなさい、私は何千年というもの
この固い料理を噛みしめて来た男だが、
揺籃(ゆりかご)から棺(ひつぎ)までの道中に
この古い麵麴(パン)種を噛みこなす人間はありませんぜ。

こちとら仲間のいうことをお信じなさい、この全体は
ただ一人の神だけのために造られたのです！
その神は、自分は永遠の耀きの中にいて、
こちとらをば闇黒の中へ逐っ払った、
そうして貴君方の御用にはただ昼と夜とがあるという訳合いで。

ファウスト

それでも俺は遣る積もりだ！

メフィストーフェレス

それは耳寄りな話ですね！
ただ、一つ私には心配なことがありますよ、
時は短く、芸術は長し、でね。
貴君は人言を容れる人のようすな。
一つ詩人と結託して、
先生に、思いを彼方此方に馳せさせて、
あらゆる気高い性分を
貴君の栄誉の素天辺(すてっぺん)に積み上げさせては如何です----
獅子の勇猛、
鹿の快捷、
伊太利人の熱火の血、
北方人の持ちのよさ、など。
その先生に秘法を搜して貰って、
宏量と狡智とを結び付け、
温かな青春の衝動を持ち続けて、
計画どおりに恋をする、などは如何です。
私もそういう先生に近附きになりたい、
そうしたら彼を小宇宙先生と申し上げるでしょう。

ファウスト

それでも俺は何物なのだ、若しあらゆる覚知が
それに向かって迫り行く人生の冠冕(かんべん)を
努めても手に入れることが出来ないようなら？

メフィストーフェレス

貴君は結局----貴君ですなあ。
何百万本のちぢれ毛を植えた鬘(かつら)を被っても、
嗎高(やーるだか)の履き物の上に足を載せても、
やっぱり貴君は貴君に過ぎません。

ファウスト

俺にもそう思える。人間精神の宝の限りを
俺は骨折り損にも身の周りに搔き寄せて見た。
そうしておしまいに腰を卸すと、
内から何の新しい力も湧いては来ぬ。
俺は髪の毛一本の幅ほども背丈が伸びては居らぬ、
無限に近づいては居らぬ。

メフィストーフェレス

御旦那。それは世間あり来たりの見方で
物を御覧なされると云うものです。
人生の歓喜が逃げ去らぬうちに、
我々はもっと賢明にやらかさなくちゃいけません。

馬鹿々々しい！そりゃあ貴君のものと云ったら、手や足や頭やしの字ぐらいのものでしょうか。

それだからと云って、私が初物らしく楽しむ一切万事が、私のものでなくなりもすまいじゃありませんか？

私が六匹の種馬の代が払えたら、奴等の力が私の力ではないでしょうか？

私は速駆(はやがけ)の出来る立派な男だ、二十四足が私に具わっているようなものだ。だから出直しだ！思案なんぞは一切ほったらかして、すぐに世間へ御一緒に乗り込みましょう！

言っときますがね----思案なんぞをやる野郎は、枯れ野の上を、悪霊から圈なりに引き廻されている馬みたいなもんですよ、

その外圍(そとまわり)には立派な緑の牧があるのにさ。

ファウスト

それをどう始めるのだい？

メフィストーフェレス

すぐに出掛けましょう。

一体これはなんと云う拷問所です？

自分をも小僧どもをも退屈させるのが、何で生きていると云えるものですか？

それは御隣りの太鼓腹先生に任してお置きなさい。

なんだって貴君は藁なんか打つのに苦労しようと思うんです？

貴君に知れている一等いい事は

子供達には言ってきかせられないのでしょう。

折も折、廊下に一人来ているようですよ！

ファウスト

それに逢うわけにはとても行かん。

メフィストーフェレス

可哀そうな小僧さん、大ぶ待っていますよ。

慰めずに帰すわけには行きますまい。

さあ、私に貴君の上衣と帽子とをお貸しなさい。

この仮装は屹度私にすばらしく似合うでしょう。

(仮装を替う)

あとは私の頼知に任してお置きなさい！

ちよいと四分の一時間の時があれば沢山です。

その隙に結構な旅立ちの支度をして下さい。

(ファウスト退場)

メフィストーフェレス(ファウストの裾長き衣をつけて)

どうとも勝手に、理性や学問を、人間の至高の力を、軽蔑するが好い。

どうとも勝手に、虚偽の心の煽動するままに

幻術魔法の業(わざ)に深入りするがよい。

奴、それだけでももう、絶対にこっちのものだ----

運命が彼奴に、なんの箝制(かんせい)もなく

突進してやまぬ精神を授けたので、

彼奴のせかせか急ぎ過ぎる努力は

地上の歓喜を飛び越して来たものだ。

其奴(そいつ)を俺が野蛮な生活の隅々まで、
平浅な日常事(よのつねごと)の隅々まで引き擦り廻してやる、
奴、じたばたして、凝り固まって、へばりつかずにはいられまい。
そうして彼奴の飽くを知らぬ性(さが)の
がつがつした唇の前に、御馳走や美酒をみせびらかしてやるのだ。
奴、徒らに飲食(おんじき)を憧れ求めるだろう。
そうすりゃあ、よしや悪魔に身を委ねんでも、
破滅せずにはいられまいて！

一学生登場

学 生

私はついこの間この土地へ参ったばかりですが、
先生とお話ししたり御近附きになったりしたくて、
崇拜の心一杯で罷(まか)り出ました。
みんなが、御名前を申すにも畏敬を籠めて申しますので。

メフィストーフェレス

御懇切甚だ忝(かたじけな)い！
君は他人同様の男をもう一人見るだけです。
君はもう他処へも当たって見たのかね？

学 生

御願ひします、どうぞ私を御門下にお迎え下さいまし！
私は一杯の元気と、相応の学資と
新鮮な血氣とを持って出て参りました。
母はなかなか私を手放そうとしませんでした。
私は家を離れて此处で、何かしっかりしたことを勉強致したいので。

メフィストーフェレス

それは君、丁度好い土地へ来られた。

学 生

正直のところ、もう帰りたくなりました----
この石壁やこの講堂の中では、
どうしても気分が冴々いたしません。
場処がどうも狭っ苦し過ぎるし、
緑なものも木も見えないし、
それに講義室にはいって、腰掛けにかけると
耳も目も頭も滅入ってしまいます。

メフィストーフェレス

それはただ習慣次第ですよ。
子供だって、母親の乳房に
始めからすぐに旨くは吸い付かないものだ、
それでも間もなく嬉しがって飲むようになる。
それと同じ事で君も知識の乳房に
日に増し慕い寄るようになるさ。

学 生

学問の頸っ玉には、私も喜んでかじりつきたいのです、
どうぞ是非おっしゃって下さい、どうしたら其処へ達せられましょうか？

メフィストーフェレス

話をさきへ進める前に、云って見給え、
君は何科を選ぶのですか？

学 生

私は優れた学者になるのが望みです、
そうして地上にあることも
天にあることも折角窮めて、
学問と自然とに通じたく思います。

メフィストーフェレス

君のとうとうとする道は間違っちゃいないね。
併し気を他処(よそ)にひかれてはいけませんよ。

学 生

魂も体も打ち込んで学問をする積もりです。
併し多少の自由や時間潰しも
勿論有難いには違いありませんがね、
心持のいい暑中休暇などには。

メフィストーフェレス

時間を着用したまえ、時は極めて過ぎ易いものだから。
それでも規律が君に、時間を儲ける道を教えて呉れる。
親愛なる友よ、そうしたわけで、君に忠告したいのは
最初に論理学講義(コレギウス・ロギクス)を聴くことだね。
それで君の精神はうまく訓練され、
西班牙長靴で締め上げられる。
お陰で精神は、その後引き続いて、おずおずと
思想の道を這いずって行くことになる、
そうして斜(はす)に行き横に行き、彼方(あっち)此方(こっち)と
鬼火飛ぶという奴をすることがなくなるのだね。
そのとき先生は幾日もかかって、君達に、
これまでは一息に、
飲食(のみくい)のように自由に、やって来たことにも、
第一！第二！第三！という奴が必要なことを教えてくれる。
一体思想工場も
織物の傑作と同じようなもので、
一足踏めば千本の糸が動き、
梭(ひ)はあちこちと飛びちがって、
目にも留らずに糸が流れ、
一打打てば千百の織り合わせが出来上がるのだがね----
其処へ哲学者先生がはいって来て
それがそうなければならん、ということを諸君に証明する----
第一段がこうだ、第二段がこうだ、
それだから第三第四はこうなるのだ、
若しも第一第二がなかったら、
第三第四はどんなにしたってありようがない。
こういうことを何処でも学生は有り難がって居る。
併し織屋に成れた者は誰もいないのだ。
生きたものを認識したり記述したりしようとする連中は、
先ず精神を追い出してしまうことに骨を折る、
それから先生、部分を掌中に握るのだがね、
あいになくことさ！それには精神の括(くく)り紐が欠けているのだ。

化学はその力を造化の技巧(エンケイレシン・ナツレー)と名づけて、
それで自ら嘲って、何が何だかわからずにいる。

学 生

どうもおっしゃることがよくわかりませんが。

メフィストーフェレス

此の次になればもう、もっと好くわかるようになる、
君が一切を還元して、
然るべく分類することを覚えると。

学 生

そういうことを伺うと頭がぼんやりして来ます、
水車の輪が頭の中でぐるぐる廻っているようで。

メフィストーフェレス

その次には、他の事は扱(さて)置いて、
君は形而上学に取り掛からなくてはいかん！
其処で、深慮を以て攫(つか)むように心掛けたまえ、
人間の頭に簞(はま)らんことどもを。
頭にはいることにもはいらんことにも、
立派な言葉があつて御用を待っている。
併し何よりも先ずこの半年は
整然たる秩序を解するように心掛けたまえ。
毎日五時間ずつある。
鐘が鳴ると同時に教室へはいるがよい！
前以てよく下調べをして、
一章一章よく研究して置きたまえ。
そうすると、先生が本に書いてある外には何も云わぬことが
あとになって好くわかるようになる。
それでも筆記は熱心にしなくては行かん、
精霊が君に口授して下さるつもりで！

学 生

それは二度とおっしゃるまでもありません！
それがどれほど役に立つかは心得て居ります。
白の上に黒く書いて持っているものは、
安心してうちへ持って行けますから。

メフィストーフェレス

ところで、科をきめたまえ！

学 生

どうも法律学は遣る気が致しません。

メフィストーフェレス

君がそういうのもひどく無理とは思わんね、
わしもあの学問の現状は知っているから。
とかく法令や法律などというものは
永遠な病気のように遺伝し続けて行く。
それは代から代へいつまでもひっかかって
場処から場処へ緩慢に移動する。
理性が愚劣に変わり、善事が禍害となる。

孫に生まれた者こそ災難だて！
我々と一緒に生まれて来る法律、
そんなものは、残念にも、まるで問題にされて居らぬ。

学 生

御話で嫌悪が益々ひどくなります。
先生の教える者は何て仕合わせでしょう！
愈々神学を遣うことにきめたくなって来ました。

メフィストーフェレス

君を間違った道に迷わせたくないものだな。
あの学問と来ては---
邪路を避けることが非常にむずかしいて。
あの中には非常に沢山の毒が隠れている、
それは殆んど薬と見わけがつかんのだ。
此処でも亦一等いいのは、たった一人の講義だけ聴いて、
先生の言葉を後生大事に守ることだね。
一体に云って---言葉にたよりなさい！
そうすれば君は安全な門戸を通して、
確実性の殿堂にはいることになる。

学 生

けれども、言葉には概念がなくてはなりませんまい。

メフィストーフェレス

それはそうだ！ただ人は、あまりくよくよと気を揉んではいかん。
正に概念が欠けているところに、
一つの言葉が時を外さず出しゃばって来るものだからね。
言葉で立派に論争することも出来る、
言葉に具合よく信仰を托することも出来る、
言葉からは小文字一つも奪うわけには行かぬ。

学 生

御免なさい、色々の質問で先生の御邪魔を致しましたが、
それでも私はもっと御面倒を願わなくてはなりません。
どうぞ医学についても亦
力強い一言をおっしゃって下さいませんか？
三年は短い時間です、
そうしてああ！分野は実に広いのです。
せめて一寸の指差しでもして貰ったら
それだけでも手探りに先へ進んで行くのに都合がいいでしょう。

メフィストーフェレス(独語)

もう乾涸らびた調子に厭いてしまった、
又本職の悪魔で行かなくてはなるまい。
(声高に)

医学の精神は楽に掴めるよ。
君は大世界と小世界とを窮めるのだ、
そうして結局なるようにならせるのさ、
神様の思し召しどおりにね。
君が学問上あちこちふらついたって無駄なことだ、
誰でも自分に学ぶ力があることしか学べないものだよ。
ただ瞬間を攫(つか)まえる男こそ

本当の男だ。
君はまだ大分いい体格をしている、
それに図太さだってなくはあるまい、
そうして君が自分に信頼しさえすれば、
ほかの人間どもも君に信頼するようになる。
とりわけ女扱いを修業するが好い。
女という奴の永遠な苦しいせつないは
如何にも千色だが、
それはただ一つの箇所から療治することが出来る、
そうして君が半分ぐらい実直らしく遣って見せると、
女どもはみんな君にまるめられてしまう。
先ず学位をとって、世間の多くの技術よりも
君の技術が優れていることを信じさせることだね。
次には、歓迎の印に、他の誰かが長年かかって、
それを求めてほつき廻る七つ道具を、みんな探ってみるが好い、
可哀い脈をうまく圧すことを忘れちゃいけない、
それから熱を籠めた、ずるい眼附きをして、
細腰のまわりを自由に検査して、
それがどれほど堅く紐で締められているかを見るのだね。

学 生

その方が結構らしいですねえ！兎に角何処をどう？ということがわかりますから。

メフィストーフエレス

親愛なる友よ、あらゆる理論は灰色だ、
そうして緑なのはただ生の黄金なす木だ。

学 生

私はきっぱり申しますが、私には夢みたいな気持ちが致します。
もう一度御邪魔をして、先生の御智慧の
奥底まで伺いに参っても宜しいでしょうか？

メフィストーフエレス

わしに出来ることなら、喜んでしてあげよう。

学 生

このままで帰ることはどうも出来かねます。
先生に私の記念帖を差し出さずにいられません。
御眷遇の印を頂戴いたさして下さい！

メフィストーフエレス

御やすい御用だ。
(書いて渡す)

学 生(読む)

Eritis sicut Deus, scientes bonum et malum.
[汝等神の如くなりて善悪を知るに至らむ]
(恭しく閉じて暇を告ぐ)

メフィストーフエレス

この古語と俺の叔母さんの蛇とに従うが好い。
お前も屹度いつかは自分の神に似ていることが苦になるだろうて！

(ファウスト登場)

ファウスト

さあ、何処へ行くのだ？

メフィストーフェレス

何処でも貴君の御好きなところへ。
私達は先ず小世間、それから大世間を見としましょう。
どんなに嬉しがって、どんなに有益に、
貴君は月謝なしの過程を履(ふ)むことでしょう？

ファウスト

併しこの長い髯の看板通りに
気散じな暮らし方は俺には出来ない。
遣って見たって旨くは行くまい。
世間に調子を合わせることは俺にはどうにも出来なかった、
人前に出ると自分が如何にも小さく思われるのだ。
俺はしょっちゅうまごついてばかりいるだろうて。

メフィストーフェレス

善き友よ、そんなことはみんなどうにかかりますよ。
貴君が御自分を信じるようになると、すぐにも生き方は呑み込めます。

ファウスト

どうして此の家を出て行こう？
馬や従僕や車なんぞは何処にある？

メフィストーフェレス

私達はつい此の外套を拵えさえすれば好いんです、
それが風をきって私達を運んで呉れるでしょう。
ただこの思いきった門出には
大きな御荷物だけは御免ですぜ。
私の製造するちょっとばかりの火気が
早速我々をこの地上から持ち上げてくれます。
そうして私達が軽いと、それだけ早くのぼれるのです。
新しい生活行程に御喜びを申し上げます。

ライプチヒなるアウエルバッハの酒場

陽気な連中の割り勘酒場

フロッシュ

誰も飲まんのか？誰も笑わんのか？
御前達にしかめっつらのしやうを教えて遣るぞ！
御前達、今日はまるで湿った藁(わら)だな、
いつでもぱっぱと燃える癖に。

ブランダー

それはお前のせいだ、お前はなんにも持ち出さんじゃないか、
馬鹿げた事も、巫山戯(ふざけ)たことも。

フロッシュ(ブランダーの頭に一杯の葡萄酒を澆(そそ)ぐ)

これで両方だ！

ブランダー

二重の豕奴(いのこめ)！

フロッシュ

お前の望みだ、遣らずに置くものか！

ジーベル

扉から出ろ、誰でも喧嘩をする奴は！
胸をはだけてルンダを歌え、あほれ、怒鳴れ！
さあ遣った！ホルラア！ホオ！

アルトマイヤー

たまらないや、降参だ！
綿を持って来い！此奴(こいつ)が俺の耳を爆破する。

ジーベル

円天井が木魂を返すとき、
始めてバスの根本威力が本当にわかるんだ。

フロッシュ

その通りだ。苦情を言う奴は出てうせろ！
アア！タラ ララ ダア！

アルトマイヤー

アア！タラ ララ ダア！

フロッシュ

のどの調子が合ったぞ。
(歌う)
愛する神聖羅馬帝国よ、
如何にしてなお纒(わづか)に一を成す？

ブランダー

厭な歌だな！畜生！政治の歌だな！
不愉快な歌だな！朝毎に神様に感謝するが好い、
お前達は羅馬帝国のために心配する必要がないんだぞ！
少なくとも俺は、皇帝でも大臣でもないことを
非常な得だと思っているな。
併し俺達にも大将はなくっちゃいかん。
法王を一人選ぼうじゃないか。
お前達は知っているなあ、どういう資格が
決定的で、その男を高上りさせるんだか。

フロッシュ

飛び立てや、鶯(うぐいす)夫人、
恋人に言伝てよ、百千度(ももちたび)。

ジーベル

恋人なんかに言伝てるない！
そんな事は聞きたくないや！

フロッシュ

恋人に言伝と接吻だ！君に邪魔なんかさせないよ！

(歌う)

門(かんぬき)あけよ！静けき夜半に。
門あけよ！情人(よきひと)いねず。
門閉ざせ！夜明けの頃に。

ジーベル

ふん、歌え、歌え、勝手に。彼奴(あいつ)を褒めろ、そやせ！
俺の時が来れば笑ってやるぞ。
あの女は俺を騙した、今に君にも同じことを遣るだろう。
彼奴の色男にはコーボルトをやるがいいんだ！
そいつがあれと四辻でいちゃつくのよ。
年寄りの牡山羊が、ブロック山(ざん)の山帰りに、
駆け足しながら彼奴にお休みをめえと啼くのよ。
本当の肉と血を持っている男一匹は
あの阿魔には勿体なさ過ぎらあ。
言伝えなんぞは以ての外だ、
彼奴の窓に石でもぶっつけて遣るがいい！

ブレンダー(卓子を打ちつつ)

用意だ！用意だ！僕に謹聴したまえ！
僕が生き方を心得ていることには、諸君も異存があるまい。
此処に恋にはまった手合いがいる。
この手合いにはお休みを言うために、
僕は身分相応最前のものを贈らなくてはならん。
謹聴だよ！最新仕立ての歌謡だぜ！
昼句のところが威勢よく一緒に歌ってくれ！

(彼歌う)

鼠が巣喰った、窖(あなぐら)に。
喰べるは脂やばたばかり、
背囊(レンツェル)でっぷり肥ったり、
ルター先生見たように。
厨女(くりやめ)そいつに毒飼うた。
世界が鼠に狭(せも)なった、
こころに恋があるように。

合 唱(歓呼しつつ)

こころに恋があるように。

ブレンダー

駆け廻っては駆けて出た、
どの泥溝(どぶ)からも水(みち)よ飲んだ、
家中かじった、引っ掻いた、
どんなに暴(あ)れてもみんな無駄。
幾度ももがいて跳びはねた、
可哀いそうにも静まった、
こころに恋があるように。

合 唱

こころに恋があるように。

ブレンダー

悶えて日中に駆け出して、
台所まで辿り着き、

炉端に倒れて、びくついて、
ああ、太息つきつき横になる。
毒飼女(どくかい)情(つれ)なく嘔き出した----
「おや！笛を吹くのも最後だね、
こころに恋があるように。」

合 唱

こころに恋があるように。

ジーベル

薄っぺらな奴等のあの面白がりようはどうだ！
全く結構な芸術だよ、
可哀いそうな鼠どもに毒を撒くなんて！

ブランダー

君はひどく鼠が最負(ひいき)なようじゃないか？

アルトマイアー

天辺(てっぺん)の禿げた太っ腹奴！
不運が彼奴をおとなしい、柔和な奴にした。
腫れ上がった鼠が、全く天然自然な
自分の似姿と思われるのだねえ。

ファウストとメフィストーフェレス。

メフィストーフェレス

私は先ず何よりも前に、貴君を
陽気な連中の中に連れ込まなくてはならぬ、
そうしてどんなに気楽に生きて行かれるものかを、御目にかけたい。
此処の連中には一日一日が祭日です。
気働きがない癖にひどく満足して、
誰も彼も狭っ苦しい輪舞の仲間になってくるくる廻って居ます、
まるで子猫が自分の尻尾にじゃれるように。
頭痛で困るようなことさえなければ、
酒屋で何も云わずに貸し続けてくれる限り、
連中は満足して、無頓着にやって行くのですね。

ブランダー

奴等は旅から来たほやほやだね、
あの変挺な様子を見ればわかる。
奴等、此の町へ着いて一時間もたたないね。

フロッシュ

全く、君の云う通りだ！我がライブチッヒを僕は讃美するね！
それは小巴里だ、此処に住む者に磨きをかける。

ジーベル

君はあの外来者(よそもの)を何と見る？

フロッシュ

僕に任せたまえよ！なみなみと一杯飲まして、
僕はみそっ歯を抜くように、
奴さんの鼻の中から、手もなく蛆虫をひき出して見せる。

好い家柄の出らしいね、
高慢ちきで、物事御意に召さんように見えるから。

ブランドー

屹度野師だぜ、僕は賭をする！

アルトマイアー

かも知れん。

フロッシュ

見ていたまえ、僕がからかってやる！

メフィストーフェレス(ファウストへ)

悪魔のにおいはあの小僧どもにはまるでわかりません、
胸ぐらをとられてもですよ。

ファウスト

今晚は、皆さん。

ジーベル

有難う、今晚は。

(メフィストーフェレスを横より覗き見つつ、小声にて)

おや、どうしたんだ、彼奴は片脚びっこじゃないか？

メフィストーフェレス

どうでしょう、そちらへ入れていただいても構わんでしょうか？
どうせ旨い酒はありっこがありませんから、その代わりに
御交際(つきあい)で面白くやりたいのですが。

アルトマイアー

貴君は大分贅沢な男と見えますな。

フロッシュ

貴君方は恐らくリッパハから遅くたって来られたのでしょうかね？
ついさっきハンス君と夜食を共にしやしませんか？

メフィストーフェレス

今日は寄らずに来ましたよ！
私達は此の前の時にあの人と逢いました、
従兄弟さん達のことを色々話していましたっけ、
皆さん御銘々に幾重にも宜しくという伝言でした。
(フロッシュに向き身を屈む)。

アルトマイアー(小声にて)

君、やられたな！奴話せるわい！

ジーベル

喰えん野郎だ！

フロッシュ

まあじっとしている、すぐにやっつけてやるから！

メフィストーフェレス

私の聴き違いでなかったら、練習の積んだ声で
合唱の歌を歌うのがきこえたようでしたね？
確かに此处では、歌がこの円天井から
素晴らしく旨く反響するに相違ありませんね。

フロッシュ

貴君は大家というわけですか？

メフィストーフェレス

いや、どう致して！下手の横好きというところでしてね。

アルトマイアー

歌謡曲を一つどうぞ！

メフィストーフェレス

御望みとあればいくらでも。

ジーベル

是非真新しいところを一つ！

メフィストーフェレス

私達は最近西班牙から帰ったばかりです、
酒と歌とのあの美しい国から。

(歌う)

昔々王が居た、
大きな蚤を飼っていた----

フロッシュ

聞き給え！蚤だとよ！諸君よくわかったかい？
蚤とは恐れ入った御客様だ。

メフィストーフェレス(歌う)

昔々王がいた、
大きな蚤を飼っていた、
大そうもなく愛してた、
自分の実の子のように。
御用の服屋を呼び出した、
服屋は早速罷り出た----
「この若殿の身に合わせ、
上衣とずぼんの寸をとれ！」。

ブランダー

服屋に念をおすことを忘れちゃいかんぜ、
分厘ちがわず寸を取って、
自分の首が大事なら、
ずぼんに皺がつかんようにせい！

メフィストーフェレス

天鵲絨(ビロード)服や絹裏に
蚤の出立(でたち)は出来上がる。
上衣に添えた飾り紐、
十字架さえも附いていた。
すぐに大臣言いつかる、

大きな勲章ぶら下げた。
兄弟までも宮中で
えらい御方と出世した。

閣下も淑女も宮中で
散々こいつに責められた。
王妃様でも女官でも
ちくちく螫(さ)された、かじられた。
それでも潰しちゃ相成らぬ、
搔いて追っても相成らぬ。
こちとらならば螫(さ)す奴は
すぐにひねって押し潰す。

合 唱 (歓呼しつつ)
こちとらならば螫(さ)す奴は
すぐにひねって押し潰す。

フロッシュ
素的！素的！こいつは好かった！

ジーベル
蚤なんぞはみんなその流儀でやっつけべしだ！

ブレンダー
指先を細くして、旨くつまむんだぞ！

アルトマイアー
自由万歳！葡萄酒万歳！

メフィストーフェレス
私も、自由に盛んな敬意を表するために一杯飲みたいのですが、
何しろ貴君方の酒がもう少しよくなくっちゃねえ。

ジーベル
俺達はそんなことは二度と聞きたくないや！

メフィストーフェレス
私は此処の亭主が苦情を言うことを恐れますがね、
それさえなけりゃ、こういう立派な御客様方に、
うちの酒蔵のものを何か一つ献上したいですが。

ジーベル
さあさあ、遠慮なしに出し給え！小言は僕が引き受ける。

フロッシュ
旨い奴を一杯飲まして呉れば、僕達は貴君を讃美しますよ。
ただあんまりぼっちゃりではいけませんぜ。
僕が利き酒をすとなりゃあ、
たっぷりロー杯啣(ふく)んで見なくちゃ駄目なんだから。

アルトマイアー(小声にて)
奴等はライン地方の者だぜ、僕の鼻で嗅いだところ。

メフィストーフェレス
錐を一本見つけて来て下さい！

ブランダー
それをどうするんです？
まさか樽が扉前まで来ていもすまいが？

アルトマイアー
あのうしろに、亭主が道具入りの籠を置いてあるよ。

メフィストーフェレス
(錐を受け取る。フロッシュに向かいて)
さあいらっしゃい、貴君の飲みたい御望みは？

フロッシュ
聞いてどうしようと言うんです？そんなに色々あるんかね？

メフィストーフェレス
どなたもお望み次第です。

アルトマイアー(フロッシュに)
あはあ、君はもう唇を舐め始めたな。

フロッシュ
宜しい！僕が注文するとなりゃあ、ラインの葡萄酒が貰いたいね。
祖国こそ一等いい奴を授けて下さるんだ。

メフィストーフェレス
(フロッシュが座せる処にて卓子の縁に一孔を穿ちながら)
少々蠟を取り寄せて下さい、すぐに栓をしなくっちゃ！

アルトマイアー
ははあ、これは手品だね。

メフィストーフェレス(ブランダーに)
そこであなたは？

ブランダー
僕はシャンパン酒がいいな、
それも盛んに泡の立つ奴でなくてはいけない！
(メフィストーフェレス穴を穿つ、同時に一人蠟栓を作りて塞ぐ)。

ブランダー
どうもいつでも外国産を避けるというわけには行かなくて、
好物で随分遠国にあるものも間々あるからなあ。
本当の独逸人は仏蘭西人には我慢がならんが、
それでも奴等の酒なら喜んで飲むね。

ジーベル
(メフィストーフェレス彼の座席に近づけるとき)
白状すれば僕は酸っぱい奴は好まん、
僕には本甘(ほんあま)を一杯くれたまえ！

メフィストーフェレス(孔を穿つ)。
貴君にはすぐにトカイ酒を流れ出させましょう。

アルトマイアー
待ち給え、御両氏、まっすぐにこの顔を見たまえ！
僕にはわかっている、君達はただ僕等をからかうのだね。

メフィストーフェレス
これはこれは！こういう上等な御客様には
そんな事はちいっと冒険過ぎますからね。
御早く！何でもぶっつけにおっしゃい！
どんな酒を差し上げさしていただけるでしょう？

アルトマイアー
なんでも構わん！うるさくきいて貰いたくない。
(孔悉く穿たれ、栓をせられ畢(お)わりたる後)

メフィストーフェレス(怪しき身振りを以て)
葡萄が生(な)るは葡萄の樹！
角が生えるは牡(おす)の山羊。
葡萄酒は液、葡萄蔓は木、
木の卓(つくえ)にも葡萄酒は湧く。
深く観よ、自然の底を！
此処に奇蹟あり、ただ信ぜよ！
さあ、栓を抜いて味わって下さい！

一 同
(栓を抜けば各自の杯に所望の酒流れ入るを見て)
やあ、結構な湧き水が湧き出して来らあ！

メフィストーフェレス
ただちっとも飜(こぼ)さんように御用心なさい！
(皆重ねつつ飲む)。

一 同(歌いつつ)
人肉喰ったよな酔い心地、
五百の豚にも負きゃしょまい！

メフィストーフェレス
民は自由だ、御覧なさい、奴等はどんなにいい気持ちなんだか！

ファウスト
俺はもう出かけたいがなあ。

メフィストーフェレス
見物はこれからですよ、獣性が
非常な壮観を発揮するでしょう。

ジーベル
(だらしなき飲みようをなす。酒地に飜(こぼ)れて焰となる)
助けてくれ！火だ！助けてくれ！地獄が燃え立つ！

メフィストーフェレス(焰に向かいて言いかく)

鎮まれ！親交ある元質！
(一座の人々に)
この度はただ一滴の浄火で済みました。

ジーベル
これは何事だ！待て！高い値を払わせるぞ！
君は俺達を見損なっているようだな。

フロッシュ
貴様、俺達にあんなことを二度とするなよ！

アルトマイヤー
僕はあれをこっそり立ち退かしてしまった方がいいと思うのだが。

ジーベル
大将、何をしやがる？貴様は巫山戯た真似をして、
此処で似而非(えせ)奇術を御目にかける積もりか？

メフィストーフェレス
黙れ、古酒樽奴！

ジーベル
箒柄(ほうきえ)野郎！
まだ僕達に失敬な真似をする気か？

ブランダー
待ってろよ！拳骨が雨と降るぞ！

アルトマイヤー
(卓子より一栓を抜く。火焰彼の面を撲つ)。
焼ける！焼ける！

ジーベル
魔法だ！
やっつけろ！あの野郎は追われ者だ！
(彼等小刀を抜きつれ、メフィストーフェレスに迫る)。

メフィストーフェレス(厳かなる態度にて)
虚妄なる姿と言葉、
心と境とを転ぜよ！
此処にあれ又彼処にあれ！
(一同驚きて立ち、互いに見合わす)

アルトマイヤー
僕は何処にいるのだ？何と言う美しい土地だろう！

フロッシュ
葡萄山だ！眼の迷いじゃあるまいね？

ジーベル
それに葡萄がすぐ手に触る！

ブランダー

此処の緑な葉陰に、
御覧、何という蔓だ！御覧、何という房だ！
(彼ジーベルの鼻を撮(つま)む。他の人々も交互に同じことを為しつつ
小刀をかざす)。

メフィストフェレス(同前の態度にて)
迷妄よ、目の縛(ばく)を解け！
汝等銘記せよ、悪魔は如何に戯(たわ)むるかを。
(彼ファウストと共に消ゆ。人々互いに立ち離る)。

ジーベル
どうしたのだ？

アルトマイヤー
なんだい？

フロッシュ
君の鼻だったのか？

ブランダー(ジーベルに)
そうして僕は君の鼻を撮(つま)んでいるよ！

アルトマイヤー
あれは電撃だった、節々に響き渡ったねえ！
椅子を呉れ、僕は倒れる！

フロッシュ
いかん、一体どうしたというのだろう？

ジーベル
野郎何処にいる？見つけたら
生かしちゃ放さないぞ！

アルトマイヤー
僕は彼奴が酒場の戸口から出て行くのを此の眼で見た----
酒樽の上に騎(の)って行くのを見た---- ----
僕は両足が鉛のように重いが。
(卓子の方へ身を向けて)
やあ！葡萄酒はまだ出るか知らんで？

ジーベル
みんな詐欺だったよ、虚偽(うそ)だ、幻仮(まぼろし)だ。

フロッシュ
でも酒を飲むような気がしたがねえ。

ブランダー
それから葡萄はどうだった？

アルトマイヤー
これでも言える奴は言ってみろ、奇蹟を信じちゃいけないなんて！